藝文製綿

秋冬

二

六
五

坎用之内

文庫

鬱文叢錦二卷目録

秋部

初秋一　秋風二　蘇三　朝貝四　女郎花五
薄四　露四　秋前栽六　秋野十　秋夕十一
秋雨十二　雁四　虫十三　霧十五　月十七
菊廿三　紅葉廿四　野分廿五　秋霜廿七　秋夜四
暮秋廿七　九月盡廿　秋雜四

冬部

初冬廿六　時雨廿八　落葉廿九　霜四　冬月四十
千鳥四十一　豊明節會四　霰四十二　雲四
紅代五十　鷹狩四　冬梅五十一　冬雜四

文庫

紫文製錦二巻

安藝　源　稲彦　撰

秋部

初秋

秋にはりぬ。ちぢのぜすぐ。くふまいぢ。せこ
の衣そ。うゝさこじ。さころもし。紅ふまし
みぢうまぢ。いと。ばくわう紅ひ。くれ
ちまゝくし。御琴。ほどそ。あゝはゝさ

（表せこが。衣はすゝ
をはこりて。云こ）

（源氏君のし）

（をうちそうけ君を）

こて行ふ。

○又六日(日三十オ)の夕月夜さゝらくずゝく、元
もるけしきの萩の音もやゝ〳〵そのあるましの
るほどにかりまうる。

○ちとるふのきみちかゝねどまだのさ花の。(夕月四十オ)
をやまのいろはどもそるゝきはまゝねど秋
の家色ばかゝく。新にあるゝとたゝ〳〵さ
家ぬるをるほは衣もけう元おきりてず見
いるやそう紅きと紫づきもゆゑあるまに

出まして。ゆうそめるれど。あてきのみ後
るゝ行ふ。

○起るをまゝいりたゝぬ秋はゝ一元青羽(椎本上十ウ)
は山ちかく風はれはもそいとしやこのみ梢は
やゝぐそわぶのよゝげさく。松をばのき
たるゝ。ぬのうめばゝうればゆゝを。
をまいゝまいよりもよろこびを。
えあひて此度をべばゝ。
いとはほく中行ふ。

蜻蛉五十一丁ウ

○すゞしくなりぬとくやうちに家〻せ沼
ひろむさきれぞ妖けさり紅葉せしろがね。
鬼ぐるんこうなどゆこのき人ごきに城し
かりくみしはよりはどひきるころ川水
よなれ月をめでゝ御あうじたしすゆ
よりそいまめこのけまでこけみやぐか
るすぢをこゝとまくそてきや行ふ。

秋風

秋風谷よりゆるるふるのようてゝと

きぐさむさにゝ云〻

萩

少女十六丁ウ
時雨うちして萩はのぜそ出どるる数
夕暮に云〻

朝貞

夕貞十二丁ウ侍童
松のしぶはるをうしひわはのずがこれま
しうゝときこめきたるぎぬすうゝ
けぐるゆ花むなのようとあくあのこの
きりくゝ家ゆるるまどのゆのゆ

ばり。

○ぼたん（七十才）

みのうしすのゐ〜せ行ひく。あさぎりを
なごめ行ふかまきるる花どもを廿丁にあさぎの
ほそこまこの花のうへにひまれたるもこ〜あるのし
きこのにさ花く。ようひもをみのはるきく
らせ行ひく。拳まを行ふ。

○ちまより（宿木十五ウ）

つるあ〜たるこ蒙はのさとう花はもこ。
むこ〜ろく見て〜わらゐに。あさ風のはの

なごめにくまどるたるをぬきとめ
まるこ〜ろ〜行ふあくるまさ行ふこの。
はのあさ女にてなぜ〜ゐるがこ〜ろぐ
ゐ〜きしはめりこの〜ら〜ぬと
りそめにぬちふ〜はあの〜行へど。
此ちしはのひ〜くるまどを本まどひとり丹
みぞ見行ひ〜る。

○そり（ロ六ウ）

行へる花をあぎにうち打きて見
ゐたまへるこの。やとあのみをくゆく元。

「あさ風ハ老なき花のぬ色ゐれや明るまきこ行て。こ花ろひとり。」

中くいろあさひだすうみゆもこぎ。や
をくさ〜いふし。
蓋君
よろ〜へてぞみるべうくる白雪ぢちぎり
あれき〜朝がほの花ごとこびてしを。
えてなきぬに。雪をれとぞ。えたまう
くるもの。ぬし。れ〜く見るてだをしぬ。
かくる雪ふるまで。
中君
き〜ぬるたにかをぬる花のはのしをれく
るくるまてれぐ。可行不詳

九月ゆるにぎほくうでさーたるこそ雨をつら
ぬきかけるる玉はをばのれがるようちなびく
きたるれど例はすくとなるまで夕風ふきあ
はきまるこころ動かうのし。

白露

ほのぐでぬそれたそみしこれ薄ままく
たそるはかぎあげくくく　この歌ごろはは冬ごろ。

神七十ウ

あけゆくくくそたまくでいで行ふみち
はぎいとこうけし。

秋前栽

相壺十五十ウ

おまへはけばせんざいのいとたそーろをれ
かりかるをいからむずるやうにくしはびや
ふにいにくさこの折りは女房ばかりの人さうろ
はは弱ひて御ニそのうつせをぬたまふあり
けり。

夕貞廿三十ウ

○日たくるほどまだきたすひくこのしをでの
らあけてまふをうとあしかく人めをはしく
はぐくはれわるれてごもちとらかまま

しく。そのかりもりぐちのさま草木など。
おのづから見所多くみな秋ぜのいと深き
みちくさにうづもれまどはしたるとぞ。
源氏玉鬘
秋にくる所のしるべ別納
はなれてはかなきこのうらにぞ。
まことたりげうとくもなりゆくかな
おぼろけにも思ひよるべきにあらず
てんとのつまふ。
夕貞四十五十ウ
○夕蕈はげつのうらこそ

ぶつ。云々

〇前栽(須ナ世四丁オ)は花。いろ〳〵さまみだるゝ。はぎ。をゝ。

菅に。海みやるゝ郎女(源氏君あひてたぐひみ行)。

〇こゝのどこゝ(松風サミ丁ウ)。

にぶきちよ。ぐつたるゝ。前栽乃花を見てまづ

ひたるゝ。いろあひ。ひかり。さるめて。さ。

〇中ゝは(野分ニ丁ま)。

はぎ。はぎ。ゝ。ゝ。はぎ。はぎ。花を。撫。さ。せ。行。る。と。

くゝてよ。ゝ。ある。ゝ。ゝ。ゝ

○ひんぐ（月十九）れ　○八

前れの紙鳥（メ吾の）やりきへぎみ　ふしまば
うりあけくぼのうるあさぼ　ぎれぎ
にみきまきあげくべこあそりがらん
ふえれ　ふくわのやのる限（おぎ）あすこ
うちけるぎ　のでめんぐさやのるぬあ
けぐれけぼ　ぐるるすぐぎぐ
ぬくれのわ　ぐたうさせのひてけれこ
ぐそに　のはや紙ふかりうり　紙（花）んの

しこれぎきふぎあこあぐそよをふのつの
かぐみあぐやれきにあひまるきまに
てぼみ人ばのりぼまてくぐこれるさ
むくよりてぐれ（菖）ぐそなそてさる
よひなでしこぼれぐあはしぼるふ
えぐとそふきてまるぎりれまるひ鳥
いとえんにぐ鳥てける吹くる返角をぐ
うれのにぐとる白ふのうれのをりそぐふし
をひある御（オホン）けをひまぐとたそひやめ

でたく。仏しげさうやきてたちいでゝくけま
ぜ。あびやをうちなるまじくあゆこいで
行つるゝ。こけどやのにだろさゞほよ
ちあゝねどみれすづりいりぬ。
藤東葉廿二丁オ
〇せんざいどもなどちひさき木どもをうゑし
そゝいとーしげきこのまわなりひとむゝ落そ。
ゝまきの女てみづしれうるだろはせ行
ふやり水はくゝきあゝたあてゝゝん
ゆきたるまーさ行。

致出七丁オ
〇秋風すゝれゝまへれぼれいの東れ
さはをゝれゝるまぐく。壁にたくゝせ行つりあの
れたるしてゝれすてこしはさせ行つる御オホン
ちはけゝひはどゝとなるあさたり。
東屋廿六丁オ
〇さいはけゝられあのれちぶせんざいれぼれ
のうゝぶくにされみぶれるるにやり水乃
わゝれれしたのさほどゝれのしあまバ。
はちくゝひふてなぶるれりり。
手習廿二丁ウ
〇かさはよゝう。あたるれでーこそだそーろ

くをうばつて。きつやうにはゞ咲そめる
に。色こはすりぎぬすがるれをのこどもれわ
ゐさあまこして。さみをおりゞさうでく
ゐて。みのみたをきてよゝしすゑたしかゞう
ちはこのめてゐるきとり。

秋野

柿 三十ウ

はるゝさ聖をもわあいうゐかうゝとをのあ
ちくしなすり秋はさしはるゝはゝ侍。あきぢ
ゐばゝこそこのまくゝる虫はさるに。松風すゞ

く吹あはせくゝろれゝとくこそ。わのくかぬは
ゐるよ。そのゝぬゞくゝそゝきゝたるゝと
えんより。

松風井オ 俊氏君の大井におはそるを頭中持ゐゞむ。ホ私に系ゐまひてもうホ羽し

○よゝゞ月よゝくちをゝら。邦とゝこしれくを侍
聖ふるゝゞゐひまへられゝのゞゝくさ憂我わあ
て。まゐり侍る。山はすきゝおゞゝう待ゝゝす。
聖四はゝゝくゝさゝゝに侍ゝれゝるゝのゝはあ
子むのこゝでのこにかゞゞしくゝたちれくを侍
聖ぬゝゐゝのゝゐりぬんゐゞゝゝ。

秋の夕ぐれ夕日のさすにまかせて山ぎいとちろ〳〵なくさるまの鳥のねとともにうへりとて三つ五つとこゝかさんこゝかとつゞくるいろ〳〵ちいさきくさぐさいとをし

○日廿一丁オ
○墨にぬりまぎらぬるさみどりこがらしの
ばりつゝけさせるをさがそぐどつ上
にさしてまゐる。

秋夕

横笛七丁ウ
秋はゆふべはそのあはれかゝるよ。落葉をこそ
はらひやりさゝて行ひくわるうまつりうち
夕雾君し
じけしめやうにこれ冬ゝどそしかどひきたまふほ
じ分るべし。
晴物五十五丁オ
○ひんがしはのうらんみ。柴君のし行のつゆ〳〵このぶに

大底四時心物苦。
就中腸断是秋天。

ゆるまるよ。花はひをぬく。御前は草村をた
ゞまるし行ふ。ものゝみ衣なるよ。ゆのたつ
いろはけしわるをたゆる。秋はてゝいふこゝをを。
いとしけびやのるずんしたくゆまつり。

時雲廿九丁ウ
秋はあめいとゝ。ぶるまるふりて。たまへは前栽の。
いろくみぢまたるぶゆはしげきにぶるまの
源氏君し
はぶ。むかしいでらしかく御袖
秋好中宮し
をぬしはは。女御のこのるにわるうまつり。

○野分ハ十オ
あの野分ごとに風さへ吹りてぬれ女
れやうにふりいで。
○ロウ
○そもそもなどよこさるあめぞひやこのに吹
いる。雲ぬ[illegible]きえすごさに云〻

雁

○浜ノ世四十ウ
れさより。舟ぶなどをうるひれ〻とくこぎ
ゆくあどもきこゆ。ほのうるたづちひさ花島
れう。このぐるぬとみやらるえいぼうげるタ
に。のりれゆくなく色。のぐれさうにまぶ

つるをうちなびめ行ひく。横洞ひ[illegible]
を。のこさはしい行つる御(オホン)まはにさくろきの
御(オホン)雁ぐよそしまつる者。故(フルヒ)ひ女ろひさ人
くれころみれぐきみくり。
横佐(ヨコサ)九十ウ
○同ぞしいでくそうなきかるたちか
君れぐひやうぶ
くさたまふ[illegible]むこの風のちとくえれ
落葉文せの中をタ音
ちぞ雁ごのぞぞをはるまぬ。うやの
あちしかるて。さそはまくさうれ琴をいれ
落葉文
けりのこのに。のこさ[illegible]ぬ行つるそれくふこの色

かるるふしぶしに心とまりはすれども、ほのぐみたる
ほゆしうぞ。題をさぐりよせつつ、
音にて想夫恋をしまたまふ。

虫

桐壺十四丁ウ
月もさし入りぬるを、秋をぞいと涼しく吹て、草村むしのこゑよ
ほろ〳〵はかるるをぞ、たちそるべかりける
えとまり。

令婦
すゞむし色ぞ、ながさ

秋あこのずふるかみだいのし
〇風柳ヒヤ　松虫なきのしたるこゑ〳〵ふきぐ
えふこゑとなのさ　すゞむしなるをぞ
〇三時明石世ウ堂ちこのくてのは色松せのぞみびき
あひく物このあうぢさるまいの
ねぞ〳〵えぞ　あるさまかり前栽どを
にむしはとをたくさ
〇うち横笛八十オあしもとるこゑすまどあてるこゑ

くすこの一行ひく。前栽の花どもの。虫の
しげき野辺をとはんとてみづからのぞきたる人
わく一行ふ。
鈴虫七十カ
○こゝの里に虫どもそなへ。ひく。風すこ
し。冷しくなりゆく夕ぐもに。わく〻行ひて。
むしのすをさて行ふやうに。ふく。キ〻
○げ八十ウ
○げみ〻ゑ〻ゑ。ゑまるゆにずもの。つゆ出
たるほどはすこのにたのしけれたけ〻ゑい
げしおとるこゝゆにおちる人すくしなること

てゆゑ。おちるけき野べをわくく。ものわ
ざと。尋とりたゝはすこせかへるゝ。ふき
けく。ふるこゝすく。ふくる。名をたゞして。
余ほどそうふきもけるまぐあるべきにに
まこのせく。人きのぬたくやまぞるけきれ
のまゝたゞる色をもぬそいとへまて
ふあるむ。なんをけるすゞもちやい
くゆあく。ゆるくたゞらたゞしふるどのくま
ぎ。ゆ三十ウ

大方は秋をぞうしなきをうすく
かすみすぐしは色ぞ〜はじやこのにのこるふい
ひをあまめいろあてるれほとのかり。

霧

夕貞廿三十オ

うけわるうちこのそ何ぞ〜は消えるぞれちまき
ちきてあぎうめいしげるほどあをもふ
かどのしのぶぐさもぶりて人あげもたる。
たとしへなくはぐらしさりそわうくかけ
きにすぎをさくあげ行へまで御神を。

しきうぬきに行。
○賢木十一オウ
夢いうつたぐまぬあさけのう
ちはぐのあくしひとりぐちかたそ。
源氏君
行方をはぐのあをやらむ此秋をあ坂山を
きうはしぶてう。
松風十二オ
○むこのはの人元。紅さいひ行る浦は朔ぎうへだ
きうはのくまうにとをはの行てへ入そは
ん寸ちちはあぐあくぐまてくなのぐ人
ゐきう。

〇夕書八十オ
さくらけ　此軒は世まで　さちわくしる
ぞ　この下もの　てを見て　ぞかうゆくをいのば
まべ　さくく。

夕ぐれ毛
山里は　ふるさとに　ちらいでん　定
をなのさくらして。

橋九十オ
〇峯は　あさ雪　はるをまちて　あのく
らし　給ふよ。云〻

ロ八十オ
〇かけたち　ますを　はけうまは　みうま
さくく　だちたるを。

孫はやへ　雲　はるをひやるへ　ぎて　れほ　あれ
なるよ。云〻

総角世三丁ウ
〇あけぐまは　ほどあやにくなる　わらて。
をれはけちひ　和やこの　ふるを　月をうら
つぶてらまて　木は　をくなの　あもの
さくとう。

月

桐壺十三オ
やみ　くまく　ぞ行　つる　ぞ
をたこのくまう。　暗ふに　あしかをる　て

ちーて月このぶどうでやくもぐるよ。元
さはーぶぞーー入まる。
未掏花十四テウ
○月やうく出くあまるまでのまれぬほどう
とまーくうちれぬあ行ふぶきんうーぬぐき
まくーぼのこのにのきーし行ふほどー
うもてあーぶ。
貝木世ユテウ
○ぬる月やうくーいでーおのーまほどな
るてあそびぬぶーまぬやまほぶーかの花
れ行まん。

三五夜中新月色
二千里外故人心。

あーて秋の月と花
とを目ぶーくーんぬ
まーん人まるぬぬ。

頃ナ世五テウ
○月れいとはるやのにさーー出まるよこよひ
ぬ十ふ秋なりうとぬぶーー出て殿上乃
れあそびーーひーく呼くなぬ行ら也の
ゆーぶれましやうるふけて元月れのほのて。
まのもーーま行ふ。二子里れ外古人れ心とず
ー行つる。倒れ洞元とぬーまび。
明ヲ世ナオ
○十三日れ月れ花やうぶーー出まるるぬぶ
あーーよのとぬさーーまるる。
○みちれほぶぬ元れ浦ーー見わーー行ひて

これをみるにつけても月のおもかげ
まぼろしにきえ人は御こゝろ
あるべきにくらうまひきすぎて
べくれぼ
源氏君
ねたまのいろをまれ駒よ吾こふるくれなゐに
のうまき時のまえんむとおもひのごとく折ふ
○むすび
て月いまるまきれどぐちぐちさびすり
ゝあけぬ。

○十五夜秋月
月にをしうしでいるる昔
ゝのふくべ一覚し出まてくもほく
れをも紅ふ。ものひぼろくにほさるべ。
○そりにあひきるてらし吹きちるほど川
風ふきあはせくにをしうきる月たのく
きしあごり。ろびのとすあるをやく
ふくるほどる厳上人ぼる人ぼりけも。
まる。
○秋月
十六夜
秋月月新すぐ一巡ほどとてくふの

くさあーで。宝丸色ふかきなのしあいせたるほ
ぶくぶくかくいまあうーきえのねるり。
○月丸あのきさ釈。のたくせのげみかくまてえの
し行ーり。
横笛十二ヲ
○宝丸えてぬぶるあきてみひてかくねんぶろ
居宗ゑゑ
ぶりきさて行ふぶるど人せきさて考せけ
宝井ケこ
きそ。かやうに。秋さの一行ふえなまにくて。
入たまあをえ。きさくねるやうにて。えのし
行ふれるべし。
紫式部日記の紅曲の記
妹と君と云とつるさせやまのぎ色

きいたれ。のうてひとりぶちうしひて。ほれ
ぶがくさこのるあるあるえれや。今和の
月を見ぬきとえありとうめき行ふか
うしあけさせ行うて。すあきあげるじ
行ひくぶ。ぱちのくみ行ーりかるる和月
にぬや歩くぶめみる人ちあるえのこのすこ
いで行へあれんうるどきこて行ーど。宝井ケこ山やは
うー行ーて。えひくきさものび行ふ。
鈴虫九ヲウ
○月さーいでぶらとはるものやこのるるほどえ。衣

なるべくば世中さまし
いつけくしぼのかくうちはがめて世中さまし
えねばぼ行ばけまて仏よりそあさま
るくねどのさまし行ふ
○月 みるよひのあたりてそのあれる
ぬをりをなきみにぎよひのあるはる月
は色まもまでげる行わが世は行までこそよ
うしぞれこまひなるがさるか
○月 やくあがふゆある夜面白き

にわのきくぼ笛のをわどとはくふる世行人
はるよりて遊びとる湯まゆりはとるかり
○みちすがら
月 いと新やのてさ出めれがをぐれ
山もだがるまうれるして一茶はもも
みちはりそういどうちあぞれくびだし
さるはこのるぞるをみつるまをぞはるく
はぞれわしこあくひとのどもそ身て遊月
はくぞり水はまてをあはすこ行し

たゝに。大納言(柏木君)こゝろゝあそび用ゐ行ひ
をりゝを思出行ふ。
夕雲君 ○人はすぎあすぎぬ池水もひとりやど
る秋のよの月。
橘姫廿丁ウ ○うちなる人ひとりをはらずしねの
ゝ琴琵琶をまくれてゝ。だちなまさ
さゞりにけゝぬまて。雲のうへなる
月はなれもの。
大君月 ○あつくぞ出まゝ。
扇なりてゝ。月をまさきぐり

まゝ言ふまの日人の
誤あるべしとの説

ありの師いとゝ出をも
らまをする。奉しく
八玉小櫛にいふ。

けるぞ。ぬぎをたるのはいみぢくら
たぎに。まほひをのるべし。うひふり
人をとゝ。ものうとくつる月は。
十君月 ○すぐちうゝ。
よび行ふ師ゝ。ちうひたる
けるひ。今ぞくうちわひたる
大君月 ○ものしたるのよ。ぬをを。
ぬどはまの。ぬをを月はけるくゝのうハ。
たる。師ゝ。ゆゝ。
蓋尼 ○ひどゝ。さゝゝ。ようにて。

つゆ〜まさ似ぶ。と紅に色のつゆ。
椎木十三丁ウ
○入り月。
なるものあの一きに。君がらをかくまつれそひ。
角筑廿二丁ウ
○れまに前栽。ほるれまるを似ずかるを花
ずすぐるを本草はるびきざるをとるを見
るさまに。やり水するる月はのぶさ。
こしきたるやうに。
椿木廿四丁オ
○十六日。月。
ワウ中君の歌
○らに。ぶ。

べきこゝらをぜ。
ちぎりぶ。
あこのめく。
ワ廿七丁オ
○ぶまを。
紅葉君方
紅葉。
さんとよ。
あの。
こぜ。
れどぶ。

○晴嵐五十六ケウ　君よるもあるにわづらはせ給ひしを
ぞ。人〻月みるとてこゝにあつまりて歌よむ。
けふ。おぼつかうするほどゆふかた。

菊

九月ケウ　九日わかるゝほひかるゝ菊
御らんじ。
伝式部　菊の花ひとえ
元よりかるゝ枝すれ。
宿木七十四ケウ
○菜はまづよりてうらうひとてわざわて

○廿三

不見花中偏愛菊
此花開後更無花

けふうひ草をさはるを中くれなゐにぞ
ゆるひとゝきにはのあんでいと見所ありてう
けふうひ草をとりわきてそこを結ひて。
菊はなかびくるとずゝのひてゆるすゞれ
みこはなの菊あるを多でたるをいとをしう
人はうもりてびとはもとゝ一はるゆる
ぞとゝあるをくゆりたるをを。抱らしや。
おかん　中君の
とく御しとゝ　れくさの歌
して。云〻

紅葉

貫末廿九丁ウ
紅葉はやうく文ばさわりて秋のはくいと
はるものあさくて ふるはどんまひ消くふるとそれわた
きぬぐくはばさる。
○山ぢもと。廿三丁ウ 紅葉がまつれ
よばゴ ゆくらぶもそとたてあかしける
うりはくろみちくしこがくこ。
少女五十五丁オ
○九月ばゴ。紅葉もとく色付キくるれ
はもくそいとるはゆくし。風おいはキる

夕暮に御ちこれわるる。色ふれ花紅葉をこき
まぜくこはるに奉らせ給へり。
角給廿一丁オ
○秋はもきを。もこのほよあをき枝のか
ものこくもこくこく紅葉しまる。
基君
おはゴ えをわきてうめる山姫ちばとの
ものきえと。はゆそば。
○此ふる文はしもゑ。
ゆきはぎに。ひまゴまる萬はゑまでそれ
ふこのゆにはてくもあるものさくまこ

○千載五十七十オ　千載君にこころをかけてしたしくそ　ちんまくそ　えのしもとりける
をゝ名葉はいとゝ　れそ　しろくほのけくまなるあに
深まし　もるる名ゝくるをまぢ　入りくるるようぞ　（中将のん）　その
あそしまりける。

野分

野分ニ　こは花の色まさるはしきさどそを　（はけ）　むぢる
に聖分きいのよしりそ　れどうくしくそ
は色ゆりておさいぢ　ちれどもはしをる
をゝしとさしそ。思ひもまぬ人ぢにあれわ

天王にれほすばの
葉の袖もぐれて

文徳天皇のもとあれ
小萩ぢを極こ風

ひなれぢれそひさわのそ　枝まよして草むら　葉
乃玉は緒みぢるまに。（唐の品）　作人まどひまし　ぬ
くれがしもとり。これほすばのりは袖ハ秋乃うら
にしそこそうぢはげりくれ　（くま）　ゆくまに。
そのもんてぢ。咲（キ）まとはしそぢ　ぢはむくは　葉
けしぢみのうひなぢまぬりぬるにうしろめて
くいみぢと。花乃うくをたばしなげくみなみ
れそやぢにそを前栽はくろはせ弱ひるをり
し　そがく咲（キ）いぢ　そとあれは小萩ちしたれ

をまゝごも君さこ
そまて。

くまちえることの風めづらしきなり。をれのつゆ。あ
ぬとまるまでうつくしきちゝをすてはちか
紫上
う鳥ゝ弱き。

同九丁オ
○やまけさどもゝ吹なびかして。そでこぼるゝおほ
くをまつふしぬ草むらさきに光いろ
まゞひたぶかはらゝをくれてとみすいの透垣
いかしどやうけをのみぶりがちに。日はわたのに。
さし出をもたゝうれひがほなる庭の房。き
らゝとして。空をいとすごうぞうりわるれ

ぬに。えゝ

秋霜

藤袴十六丁ウ
九月に光なりぬ。ちゝ。をむすぼ。を。えゝ也
かゝるあしさに。えゝ

秋夜

末摘花十四丁オ
八月ばかり。ひすくるまでまつ月はて
ろをとなさにぼけ光ぞのうきゆくゑはつこ
ぶろ。ふくゝのぞけれどころぼろくて。なゝ
はこゝ。かゝりいぐゝ。うちなきなどゝ弱き。

○紙角十三丁ウ
秋は萩乃露もちひ。かくらぬ所ぐこれば
からあはれ杉ほのゐをまして峯は風ふま
ごのこれ虫ぞこころぼそげなのこゑてわきる。
○手習世九丁ウ
ゆふぐれのうのぜれとえあはきなるに思ひ
いづることたほくて。
浮舟君
ん心も秋は夕をわのねどもなごむる袖に
雲ぞみぎとゆ月さいでぞ松のこさほどみ。
ひるふみありけるゆ中将ねそ〜ゆ。

暮秋

○源氏十二丁オ
ひのけくゆく夜は秋ぞ
九月ゆなりぬ山ねろ〜いとはだ〜ゆ木は葉
はかくろへなくかりてゆろぞのこといとゆみじ
さほどなきぞ〜
○四十ロ十ロ丁ウ
九月十よ日ゆ堅山乃ゆ〜さはゆのくらぬ
人ぞにたぐ多きねばゆる。山風ゆもとくぬ木
こは木末ゆ宮はくぞはゆこころのわくて
うあ〜そひちるまぎれゆもふとさぞ猛
の聲うゆもの。今佛なぞは〜ゆぞのりして。

人はけもひいとすくなう。ホがしの吹たる
ひまるに。鹿もたゞ。ゑの花乃ゑとにたゞ。ぎみ
ぢく。山田れひさ（引板）きまれとるこの。ゑゑこきゝね
どゑれ中にまゞ。ゆてゞうちかくまうきひのほ
なり。鹿はゝ。ゑゑゝとゞゑ乃これもよ人をたゞぎ
ろのしがほよみかしゞのまゝうどゞうきひ
びく。草村乃むし乃こゞより。雨なげゝ。ゆゝ
よわりてゞのまたるくゝれもゝるゝゞゑれ
われひとりはゝ。ゆなゞうゝもひいゞ。ゆのけく

見ゆるなどゝうしゆまきいれこのごろのゝとなまゞ。
をりかゝゝゑゝのゝるゝやゝとゝまゝこゞゝ花ほゝとれ
物ゝゞのゝしゝさなゝ秋。
○橋姫十七オ
五明乃月乃。まゞ。秋ふのゝくゝ。出るほど
にゞぐたちてゝいゝとゝのびて。ほ（オホン）とゝに人なゞ
ゝなくゝやけまてたゝをゝけ。河れゝるゝゝか
まゞ。舟ゝどゝをわゞゝゝゝゝで。馬（うま）てなゝけ
。いりもてゆくまくゝにゝゝゝゝゝがりてゝみちも
見ゝゝぬゝゝゝゝ木れ中をわけ行ゝゝとあ

らまーさのぜのさほひようぼろくとたちみぐ
るくこれちの家のうちりかくるえいとひやかよ。
ひとやとあくぶぶくくぬしまさまひぬこのし
はありさあどえをさくあくひ弦ちぬて
こちにこうろばそくだうしくだがさしかり。

蕉君
山おろしにさへぬこれちの家よりえあや
あくもろさ吾なみごのし。

総角五十三丁ウ
○九月十日れほどかしまで野山のくさえだ
こもひやらるくれちぐしあきくかきくし空

のむら雲だうろしげかるタぐれ宮いとど
ちぜこうろかくなごめ弦ひていのにせんれ。
ぢ

蕉君
ひおしはうりてまるり弦了。

宿木六十五丁オ
○宇治のこうやをくしうみ弦ちぬとさるをい
やでむのしさほくかるこちしてすぐろに仏
ぼてけしれぞなこの月かよ日れやどにれちし
ちこうぶぐしく風のこ吹ちこひてころす
ごう。あこうまし水のれとろこやどえ

あにて。人か者をことに見てゞ。みるにまぎれ
かさくしかなゝことゝでかぎりかさ。

九月晝

園屋三十オ
九月はごもあるまゝ。紅葉乃色ときまゝ
せ。霜のゝ乃草。むゝくたのゝう見てわる
おこゝ。ゑゝ
角総五十四オ
○あめひやこのこ。打てゝぞく。秋ちつる乃ゝ
さけすごきにこ。ゑく

秋雜

七月廿八ゝ
夕ゝふゝ
あに月ゝあ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

秋はきぬ紅葉は宿にかりしきぬ客人よ
わけてぞ人も踏まば

かにぞのさまあしてぞすれうちなりつるさまなる
夜今めきさまとるえれこゝろおかしぞきよく
すめる月はをりはきおのゝ涙をとこい
さくめでぞあれをにあひこそて庭の色を
みぢゝうふうわけをるあとをおけかなな
ぞねさまぞきくをこまて。

殿上人
琴は音も月もろなゝぬ宿なぞうした
しなきを人をひきやとめける。殿上人詞わろのめのおど
いひゝ今ひとゝきこゝはやまべきを人のつる

とさにてしかこゝい弦ぞおどいくあざまを
かしねぞ女いさうゝ急にくろひく。

本居内侍
このしに吹あはまめる笛はねをひきを
とぐむべき言ちぞおきとしまめさかは
まにこゝ

夕点十八テウ
○八月十五夜くるしき月の音ぞひまれ
かるゝや殘月なくえりきてんゝひ弦
ちぬすまひはきるものぞしきこ曉ちの
くちにけるかるべとなりは家くあやし

きさらぎのをはりゝ。ゝくめさまゝてあれいと
さむしゝやこゝとゝゝろありとひるまをだのむ所
すくなくおぼなこのはのようしをだまひのなね
ぞいとんぼろなれさるどのゝろさてゆ雪。
などいひのきにをさこゆいとゝ衣なるれの
ゝのもゝのいとおふにたきいでゝゝぐめさまわぐ
をもばどなさを。女いとをづゝく思ひゝ。
日十九丁ウ
○ゝろゝくの衣うはきぬるはをゝのゝゝのに。
こおゝこのゝしゝきゝゝわゝさゝれ。空とぶゝりはを。

とうあけめて。ゝゝはびかゝきゝとたはゝりはし
ちゝのゝこゝはまゝ一所ゝゝりゝゝゝゝやゝをゝをひきあ
けゝゝひゝく。をゝゝとをに見ぶゝゝふほどなゝこに
をにゝれをゝるゝれ弁。前栽の雪なほの
ゝ所をたゝゝかゝゝ如ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みをゝりゝのゝゝしゝくゝかゝゝはなのはゝゝるゝゝゝゝゝに。
まゝほゝ雪ゝゝゝひゝへゝる御みゝゝゝゝめて
たるやうにゝなゝきみゝゝをゝ。をゝくゝゝまゝかゝく
ゝゝばゝゝる。をゝゝゝゝゝひゝつのゝあゝゝぬ

いよいよそのけしきゆゑなるものなり。

○秋の山（わかばすぎて）

ほしいまゝにあれとりあつめ

るこゝちして。されひとある。この月。秋風はげしく

て。まれにもうあぬ。海のうへを見ぐして

ゆくに。八道きいのご。秋ようふのうたてば

なまるうちして。たゞなひいまもうつみじ

うといみまきど。たまもくいとものびのるし。

○たほかるみてを。（七十オ）（撞）

につまてをすぎにしまのく。ゑうつけ。

うめをうく。たのうくまもふのく見て。

ゆいぐへ。ゆどを。思ひいでこゝさい。

○夕風。（七十オ）（花東葉世）

ものさたる。渡殿（ワタドノ）の上見上げの。ふ庭の面。かゝ

ちおりさおりゆけやむでとなのき家けなどを

いくあをさあのさ。そまぢすわうこび

波（ジメ）たど。常のごとく例のこぼ。ひこひぐかりみば

しきを見せて。みどのきまのども。ほのかにまひ

けい。紅葉けいにのうるほも。ひくまもをを

げなり。

○八月朔日（夕涼四丁オ）

きはなるに。山里はあるさまはいとゆゑ〻しくこそ。

○日ぐらしがこゑになりゆくに。空はいとすさまじくあれはきこ（四十七丁オ）

ゆるわたりて。山の端もをぢこゝろすごくひぐら

しなきしきりてうきしづまりおるなどいとをかし

なびなる遠き所〻の前の前栽の花

どもを。いにしへをおもひやるに。水のこゑを

いとあはれおもはしめおるにわれひぐき

木陰く行くえわるさまなどもしてをぶ（ボ）ろ（ロ）の猛よむ

時をまりてかねうちあるいはたは色もかはるも

ひとしなめひくくをもくさこゆ。

○風いとんぼそうふけりく秋のけはいこむ（十七丁オ）のねも。

鹿の鳴ねも。瀧はれもひとつはみだれてえもいはる

ほどあしねもたゞあはれあちこち蛍人をとはねばあ

ばきえはてしこゝかうしもさるがうづりのこゝ月

はれ山のそもつの地ほどもあがるうもの気なり。

○昔は山里より（手習十九丁オ）

もこぞのはもおごやのなりけり

ざこゝも見あるる所の木ぞもたゝまもーろく。前栽か
どゝもたゝのーくゝも見をはくーとり。杖よりいけ
ば空はれ〳〵ーこさまゝ衣かるを門田はいねのるを。
所よつまたるものまねびーはく。わのきこ女ども。
興
らーらたひきよりじあつりぴーこーかゝーはれとゝ
はのーくゝこーあづまぢはもかどゝも。四ひ出ーれ
てゝのはゝ夕ぎりはゝ泉所のはゝをもー山里より登。
今ゝこーいりて山よりるこかけこる家なれば。松
のげちげくゝ風はれはゝをゝいとんぼゝをきこゝ通く

とはこかひちをのこーはくゝはくとなくゝあや
このなり。尾君ぞ月かどあつのこ歌ゝ。琴かど
ひきたるふかゝ。お将のあるこみかどゝ人ゝ琵琶
ひきかゝーはくゝあそゝ。

雨さかりもとやかりうけんき劉禹錫が句ばかりぐー言ばかりまバ器ひ。

冬部

初冬

夕ゆふ 五十二オ

今日ぞ冬ふゆ来きたりける毛もみぢ色いろ

ぐれて空はれらーさっと気はれ。おごめてし

ぐるひゝ。

源氏君

すぐさにこ来こなわ。ふる毛ふこたこいゆく

ゆふ。ぬ秋のくれの月。

若紫 四十九ウ

○立庭は木ぞとちぬゆのこるれどはうさあ。ぐー毛

かれの前栽。色にのけるやうにだ毛ーろくて。

葵 四十二ウ

○ぐれらるーて。それあそれなる雲はる毛。

か将は君。すびる色はなほーさーあさうす

らのにこるもぶべーてぎーくあざやかて。ん

ちぢすーきさまーてまあり紅ーてぎみ。

にはは紅ぎはうらんなれ。この毛て霜枯

は前栽みるまほぶ紅ーてう。風あらかぬ。

ぐれざとしーたるほど風毛あーてふこちち

して。雨とれるうもやかるゆん。今毛ふ

ずとおひやうごちて。ぐーぬ毛つき紅くる御

さるの。あにく。ものの。臭ばて。ゆくなり。むたまひの。
なり。ゆくとも。なんう。と。なめう。さこち
にこちまそ。こまこち。ちのうけらめ。こまま
ぞ。ものとゆ。ゆう。ゆみづられ。ものまま。ゆ。ゆ。
らひ。ゆ。ばうう。ものまま。なま。ゆ。

若葉上六十三丁オ

○みぞ。ゆ。ものまま。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。葉。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

らけやぶる。ゆ。ゆ。の。
いづのまにか。ゆ。ゆ。ゆ。

元亨

もみぢせぬ。ゆ。き。
はの山。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。の。

元亨

らけまくに。馬車ゆき。ふ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
きゆ。ゆ。ゆ。

同下十六丁ウ

○十月。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
え。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
み。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

時雨

奥世八丁オ

ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

すこしひまあらばとぶらひてとぞ。

○賢（不世八十オ）

秋しぐれ。ふりぬべしとぞ。

ぬれぬれぬ。

（朧月夜君）

木枯のよくよ侍（子）

さけくらもつるくらり。まつ。

（夕霧五十七十オ）

○時雨ふるあるとしのよろぼ。

ふりかなしくらはぬ。

（落葉宮）

のぼるよ。葉

泪雨。ふる侍

雨も降しかぶ。

袖ひぢぬ秋ぞ。

ぬるこれなびよ。

○神無月。

（幻廿丁ウ）

しぐれ。

ふりなどの行ひ。

ぬぎ。

かどぢ。

（源氏君）

天空をのよ。

ぬ。

落葉

宿木七十二オ

○木がらしはげしく吹まどふこのまぐらにつゆもこぼれぬる木ぶかなるつきなくなりぬるかなみだ

ふるわくらばのあとを見て袖を見わたしくもりみぬそらつぐれぬ

霜

若紫四十丁オ

いみじうきうわるうそだなる袖に霜をつゝぶしうらかれたるもとのうりぬべきにさゝぶしうらかれたる

若菜下十六丁ウ

○さゝぶしうらかれぬ海はかれまく

かれそしらく見てはいとあはれなるこゝろばへのおもしろくかぐらしたるもとのうりぬべきにさゝぶしうらかれたるもとのうりぬべきにさゝぶしうらかれたる

冬月

榻十五丁オ

しかれてまつみてはいとあはれなるこゝろばへのおもしろくかぐらしたるもとのうりぬべきにさゝぶしうらかれたる

源氏君の

まつ。かれつさびぬ。月さしつゞらいとのぬ

えもかれる雪はあはれなりけるもあり

しろきよりはすきるはの
角総八十九丁オ
○雪はのきくしるるびねをちかなどのこし
てせはんのすきもあるこしのふたるぞ
ちはの月ねはくもりなるをいでそ
すぐれ美キあげくく鬼ゆひもひの音
はすのまはくるもまくはくはくはこ
くはねぬとこのすくのかるをきくく
うくはくはくは

源氏君いとうつくしうもてなし給ふ。わかき人々月は見るものとも思ひたらぬひとびとにて、例はいとどうまれぬ暁はそらゐる千鳥いとあはきにふく。

源氏君 友の鳥まうこゝにふく暁をひとりねざめの床もさびしきまでなれぬるひとりごとにてすゝまれぬるこゝろ。

へ。

豊明節會

又廿一節会はいとゝ花々しくもあるものかな。大将殿は見ぐるしう座上しをれたまへるを、ふるいたうたまへる頭弁、将監、人々の将監などもうるはしくぬぎかけたまへるを、うちまぜたまへるあるべきこゝろ。

霰

（浮雲 三丁オ）
雪あとのぬかるみに、ぬぎすてゝ、云々

雪

（未摘花 廿三丁ウ）
いとどうらめしなりける雪のさゝれたるに、
ふりつゞく空はたゞさへうすくらきに、
まして、くれぬほどをまちつゞけ給へるあ
くるまゝに、消まさる様にぞ見え
給ふ。

（ハ廿四丁オ）
○かうらうて、明るたゝ、をなるまゝに、つかうし
て、ぬぎすてゝあげ給ひて、まゝ前栽は雪を
見給ふ。姫みあげる給へなくなるまゝ

あれわたりてみだれうちしぶるるに、ふ
つゝかしくゆこのんとをあるべくも云々

（ハ廿六丁ウ）
○御車よせるゆのいとらうゆのみよ
ろぼひくるよりあたりをうちこそ
ろばしのうちたるゝ松やこのうちに
気をもびらかまどくるゆ松は雪はく
あるこのびるまゝ山里はうちして
この気あるる様。云々

（ハ廿七丁ウ）
○たちぢかのこそはうぐるゆ。ぼらん

（吾袖ハ君に松ふれば松山のなみとゝ泊れぬ日なさ。）

めぐりぬるはるをそ紅ふかうやえぶかほよ。松のき
けだれの紅わきこのくれさきこぼるゝ雪も。
なりぬるはるをそ紅ふかうやえぶかほよ。松のき
かゝるとわくえなぐ（ほ氏君のんとう）
はん人をぐ紅をみるまぶ。
○望（四十オ）
るらうれうへえ紅くあるまばひれあ
はぜなくさゝ人ゆきるゝ山ゝたる
ひのるぶやのるゝ見いまるる。

（貫木十五丁オ）
○雪うちゝるゝ見ぶ。聞ぶるぶゝうて。院ぶるもぶやう
やうゝへめのれゆきくぶるやのなるに。大
将（源）撮ゝるゝ見まゆるひて。ゝるきゝ所ゝのぶ
るりきゝて行ゝぶれまゝれるえゝれ雪ゝ
きゝるゝくぶきゝ枝ゝるまたゝるをゝるゝるひてみゝ。
（吉ゝゝ宮）かゝゝゝゝゝゝゝ松やゝれゝゝ人まゝ紫
紅ゝれ年山ゝまゝゝれなるゝゝゝれゝゝゝ
あゝゝるゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝ大将ゝ
（オホン）
御袖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まるに。

保氏君

さしわるる泡はだゞみのさやけさよみるほど
このぞ武蔵なぬぞ。うの山ぶしに。はるばるまよふあ
まりわのくしうぞあるや。

○霜月せいこう

日卅八十ウ

御國忘

ふるとしのくれぬるこゝろぞ。ゆきふるよりはやく。

○ふるとしを法ことに。

日卅九丁ノウホン

雪はしぐるゝ。ぬきくれこなひ物。

○冬ふるくれ。雪ふりあれもする時。雪ふりあ

頁ナ四十十ウ

しまこそ。とゝに。ちごくなどめあひくく。きんをひ
きすさび行ひくゞ。ものさびに。ゆくさはせ。

氏ノ大補惟光ノ

大補よこぶ。ふるとぶ。ふるとぶ。ふるとぶ。ふるとぶ。ふるとぶ。
て。あそれまるて。ひきまへるゝとまて
色どもきわめく。間をのぶひあつり。

蓬生十六十ウ

○霜月。ばりに成ぬしぬぞゆきあ〳〵れぶち
にくゝぼこのまきゆるすきもあるを。朝日夕
日をあせぐ。ものさびぐ。ものの。
ゆきりて。白山おそひやるゝ雪ふら

ちこいでうるーを人がるかくて。けまくみと
なごめ行ふぱのうなきっとるぐ。さこてなぐ
さくんなきみわ。ひこぐ。ぐるこ。けるる
ひとさくゆくくぐ。ぐるもとうぐ。ぐるみ
丁けうちをかぐくぐ。ぐくぐ。れぐもるる。
陽雲六十オ
○雪のさくしふけるるくしぐ。
ゆくさくのこぐのこぐ。ぐくぐ。れくひけぐ。
いきくとよさくぐるいでるるぐをせぬ
をみぐはのこはるみるてくさくく。

ぬぐをけなくかるもるるもるるるる。
ねくるるうるぐいくくく

雪もけさとすみ山を見まてそんはせめ
よみ侍りしめやもさをつひるぐさも。
○此雪ちらくしてさくわつうあり。（口六丁ウ）
○冬ふかくのこがんわざ風をさすりてけう（槙十丁ウ）（安部宮）
ぐしこしにけまとしたれ一めすりてみれ
えに例れちのぢさ家ゐと行ふ。雪うちし（源氏のし）
つくえんなるたうれ林なのたのうさはじ
になるる御ぶどそをつよくきさあ行（オホン）
ひくこうくるぶくしし行くるぶ。

いどこうよわうん人くさいすぐれて
ちり。
○ゆびきる御そどそなるゆびいうあひきさ（口十一丁ウ）（オホン）
なうこれまくなるなくくんてくくく

源氏君物

徐々ぐし給へ。人は御ぞいうちも笑おさうて見給。晴々に侍まてを人はこゝろをうけすめる花をみぢかきのよりを色は夜はけにこめる月よ。雪はひとりあひもとる空こうめこーう色なるさきはは身にしみて此世はこのはゝとまぐ思ひなのがさしは杯ゆーうさを色をはらぬをりなも。すきすぐきたためいひおきしを人はこゝろあさゝよりてゝ。みすまさあげさを行ふ月

きくまなくさゝ生くひとは多る月てわたさゝしかゝるるきをしかもる前栽はのあ。こゝろゝるるーうやり水をいとうもせびて池は水をいとびすぐさにわとぐ杯ゝ雪まるぐーせさ勞行ふおりしげるすぐ。ぐーらはきぐを月よをゝく。おはるきやのいなるおるのさまぐのあこめみぐしかをおびーとぐるなきをみる月ぐ。なのあいめあゝてるをいあらふ

このみけ山ぶしのさと庭のまへにてきて
たゝずまるゝぶしのうちひさぬ
ちわくちぶくよろこびはるるあつさかな
どゝ氏杉さくらうちをけ山ぶしのゝげ
なりつゝいとゝ杉のうるはしきもみぢ
この山ぶしのうとでわかれ

真木柱十三丁オ

○くるしかぬまぢ山もそうきたちてゝ
でゝぶしもとゝ杉ぶしの雪のきえ行くぬる

四十五丁オ

○さゝひとゝ色ゝ雪きえゝひとゝ

あり。花いかものぬしんうのかぶしのさくらの
まをあゝぶくうゝけぶりこゝろつ
くりあつ。

四十六丁ウ

○日氏くるし。雪ふりぬべき空けしきえん
ぶうゝうゝゆる夕なりけり。

若菜上卅丁ウ

○又は日雪うちふり空けしきえのあ
くれかゝるこゝろ地の御ぶのゝ
雪ゝあとゝ行ふ。

四十四丁ウ

○清水寺杉ふるゝ山行ふをかんをすれ

るる明ぐれかの空そ。雪はひすりゆくを。ぼつぼつ消し。名殘まぐれかる御ほ
ひ。やみもあるゆかりとひとりごとる。
○雪八畳に消はてるまがらとうるほに
はのふとんぐめ見くわすれぬほどなる
るるなほ殘まる雪さのびやのうち
ずさびのひさしみのしらちたき行ふ
そ。ひさしうるかりけるなひ
ゝ。人ゝそもそはやもうさを

手城陰處猶殘雪

てひさあけうう。
浮舟廿四丁オ
○雪ふるのたふりみぶれ。ぞ。ぞ。ゆ
まこぞ。御ひびくやきぬ。

綱代

橋姫廿九丁
あづろ人ゝわがけるうさ。ぞ氷奥え
よるぬよもあんすきまげるつ
かりと御ほんれ人ゝみやとい
き舟どもそ。榮うけてそ。なるまし
きをけいとなるどをけ。ひのふさまざをけ。

はるのなごり水はけうらのびやまるたまもの
れるまくぶ。れるすゞとなるまゝはつはなのさ
なり。わまもうのたぶたものうてなるま
ぶくまゝ身をぶはよくぶきをこのはをれるまひ
りゞくる。

鷹狩

宇幸三丁オ

雪ゆきぶいさゝうちくはるく道はをきえ
むるゆみたちは達ゆなぶこれ。鷹ゆきの
ぶゝひはるるをぶゝゝきとりはれはよそ

諸本

ひぶこれをもうけ折ふ。諸本鷹狩ぶこれを。
ゆゝくもるめなれめ。ゆう衣をみぶし
ゆゝぶゝぶゝきとなり。ゆく

冬梅

若菜下百五一オ

雪はゝぶいさゝのうちるまゝ。武はをゆうちのく。
うめのゝゝゆきみるのひめうくぶゝ。
みゝり。

冬雑

未摘花二十七丁ウ

御ゝるるいぶゝ

賢本面ウ
土佐さたの北
世のやとちむる之のくきこ
つけてとまり
ヤ・ゴのはい

昔ぞかぐれあづかりさぐ出て
きれのぞいとみぐ出てるむすめ
にやうまごとやばーるるたはさうろ
女はぞあこ雪ぞあひくすけよどひさむ
ーしたかきつる家をつてあやーき物よ。
火をぐーにはのいかくぐ袖ぐみまき
ア・かきれかがどとあゆやーなぎよりて
ひきたすくるいとなこ見御ぞ
はく人よりてぐあひる。

冷標世二ウ
○雪みぐれはのさとみぐしあるる日のいこ
やはは御ありさぞのなのがあたまのろ
むとぞかきひやり宮くあひくく御はのひ
てまつ通紅ぐり。なぐ今はそいのよ御
らむぞるむ。

源氏君
みりかれ
まのりたるむ
はうみのぐ

推本世一ウオ
○雪あくれみくーはきぞかくこ

うきあるものとぞのたれなれど今ぞしぬべく
れをひつるたもとやあまのうみのうきもしら
ぬかな。

角総カ十二丁オ

○まぐもりのうきほどけ雲はやもひいわ
さもげなるみくもあまてしてらま
けれときこゆ。

宿木七十二丁オ

○いとゝきあるる澤山木もやどりもとるはけ
きけいろまぐまりもるこたるだるとす
らひきもてゆくゑてをわがえて

ゑうゝ物行ふ。

薫君

やどりもとをれいてもぎをこけをとの
旅まをいつのみさらびこのうゝ。

紫文叢錦 二卷畢

紫文叢錦

橋本稲彦著

文章をかく人のくちに源氏ものがたりの中はめあてとなりぬべきこゝろ葉とゝのをぬきいてゝ類聚したるゝ書なりされど文章のこゝろ〳〵をも訓句をわかちぬくらさんみちより心なるゝことを多くのるゝ〳〵まゝ学者の失をもそなへ備ふべきものゝ

小本 全部八冊

○初編一二巻二冊

春部

初春、子日、鶯、霞、春雪、餘寒、梅、柳、春月、春夜、春曙、帰雁、花、山吹、藤、暮春、春雜、

夏部

首夏、新樹、若竹、郭公、夕日、橋、五月雨、蛍、夏月、瞿麦、水鶏、鵜川、夕立、納涼、篝火、夏雜、

秋部

初秋、秋風、萩、朝顔、女郎花、薄、露、秋前栽、秋野、秋夕、秋雨、雁、虫、霧、月、菊、紅葉、野分、秋霜、秋夜、暮秋、九月盡、秋雜、

冬部

初冬、時雨、落葉、霜、冬月、千鳥、豊明節會、霰、雪、網代、鷹狩、冬梅、冬雜、

○三編三四巻二冊

恋部

雜部一

雲、雷、風、雨、空、山、川、海、宮殿、居處、荒涼、人事、奉公、行粧、盛衰、交、言談、寢床、

○三編五六巻二冊
雑部二　容貌、人情、懐旧、　同三　賀、婚姻、産養、嬰児、離別、旅、海路、病、物怪、衣傷、

○四編七八巻二冊
同四　天教、夢、飲食、器賤、衣服、　同五　神祇、公事、音楽、才藝、遊戯、宴、歌會、学文、文業、教誡、評論、俳諧、

同著
燈文消息　源氏のうちより消息文をぬきいでて傍注をうけ消息をこのく助とす　小本　全一冊

同著
消息文栞　えらびくのうちより消息をあつめくくあつめたる　小本　全部四冊

文化五年戊辰六月

書林　京都　額田正三郎
江戸　須原茂兵衛
同　西村源六
同　宗七
大坂　葛城長兵衛